

#### ◆嶋田正文作『あの頃～通学路で』について

嶋田作品を多少読み慣れている者から、以下勝手な読解を提供させていただきます。勿論、作者自身の意図との齟齬もありうるので嶋田君にはご勘弁。

単に青春時代のウブな初恋物語とだけ受け取ったのでは、彼の施す仕掛けが読めません。終盤にある狂熱的信仰集団の様相との対比によって一層その純粋な戸惑いが強調され、それらを優しく見据える視点に、全篇の主題が集約されるのではないのでしょうか。

#### <嶋田君の小説手法>

今や伝説的な「サヨナラだよ(菊地久治朗読劇場)」がそうであったように、事実を種にフィクションの味付けを施す彼の手法は、此処にも発揮されており、必ずや具体的な人物像があった筈。彼ら(おそらく同期生)はきっと、これを読んで赤面しておられるか、はたまた往時を偲び遠く遙かな目付きになっておられるか…。

#### <「通学路」の意味>

読者を校内から最後のポイントへ導く「通学路」の詳細様相もまた、彼の異常なまでの記憶力によるのみならず、或いは卒業後の現地取材とかで再現しているに違いない。皆さんご自身の記憶との照合、さて如何でしょうか…。こうして作品を振り返れば、作者が単に当時の「ウブで心もとない青春時代」をナツメロタッチで描いているのでもなく、それと全く異種の「確信ある狂熱集団」(特定の団体というよりは、社会的政治的にもそのような人間の在り方は当時も今も多数存在する)を唐突に闖入させたのでもなく、あんなにも世間の動乱から離れたところに、我々の人生の一齣があったのだとの深い感慨を思うべきか。作者の視点は、「狂熱」と「初心(うぶ)」の両者の間の小高い地点から、誰しもが日々通った「通学路」を、眼下の街並みを背景にしてこのように優しく眺めるのだらうと思われ、我々の心理は、我が子を遠くからじっと我慢して見守る親心のようなものだった。」

(蛇足：敢えて難を挙げれば、洋と林檎娘の二人が坂を降りて来る間に、良二と僕の公会堂体験を挟むには時間設定の無理がありそう。時代的に履物の鼻緒は切れないにしろ、二人が立ち止まって、或いはどこかに腰かけて仲良く語り始めたので、馬鹿々々しくなった二人が公会堂に入って行った…とかの工夫があってもよかったのかもしれない。)

#### ◆(電子版)「嶋田正文短編集」と残された時間について

「こんなの出(て)来たよ」と四季折々に届く彼の作品を適宜整序集約していたら、既に 2000 頁近くになっています。互いに命ある間に「嶋田正文短編集」として電子版にでも仕立ててみようかと、いずれ吉川崋山房に相談する予定。崋山房は、かつてご提言の「千葉高 43 同期生叢書」(第一巻は『永遠の朗読劇場』のつもりで助力したのですが…)をサッサと見切って独自の電脳書籍刊行に乗り出しておられる。確かに同期生の一割を彼岸に送り、残れる者も日々親を見送りつつある現在、誰しも自分の始末をつける日々にいそしむべきでしょう。オスカー・ワイルドの燕は中々飛び立てぬうちに雪の日を迎えます。

同期両兄がご母堂亡くされた報に接し、独り残る我が母との時間を惜しみつつ、当方は当方で「同期生叢書」(頭の中の架空叢書)の最終巻を標記短編集に設定しようと勝手に思っています。

菊地本でご協力頂いた山折哲雄氏にも、本年中に卒寿祝を届けたい(当方と同じ誕生日なのに失念)。

では同期の皆さま、ごきげんよう。…と記した途端、嶋田君の「新作」が着信、互いにまだ死ねそうもない。